

まったく怪しげな哲学入門

宇川 升
七五〇のり学文 交文 入呆 賢

新たな取り組みとは何か

新しい学期が始まりました。新たな取り組みを始めた先生はうまくいっているでしょうか……。

子どもがキラキラ輝くのは実は新たな取り組みによってではなくて、教師の新たな視点、新たな価値観、新たな評価の基準が実践のなかで始まった時に初めてキラキラ輝き出すのです。教師は往々にして育てるための評価ではなくて、「評価のための評価」子どもをできるか、出来ないかに分別するための評価に陥ってしまっているのです。そしてそれに全く気付かないでいることが多いのです。

もし、クラスの子どもたちに輝きが乏しいならば、もう一度、自分の価値観に立ち入ってチェンジを試みてください。

ところで、新たな視点になるためには何が必要なのでしょう。それは実は人間に

対する感動なのです。素晴らしい芸術や文学や、そう意外と映画がいいかもしれません。人間や自然に感動した時、人は価値観を正しい方向にチェンジできるのです。

「よい授業をしようとするれば、よい授業をする子を育てなければならぬ」

長年教師をやっている、「自分の授業づくり、クラスづくりの力が深まったな」とふと気づいた時がありました。それは「よい授業をするためには、よい授業をする子を育てなければならぬ」のだと気づいて実践を始めた時でした。

先生方は4月から精一杯努力されて、よい授業を試みられたと思います。私も長年そうしてきたのですが、どうも「よい授業をする」ということが必ずしも「よい授業をする子を育てる」ということには直結していないケースが多いのです。むしろよい授業を求めるが故により授業をする子を育

てていない。あるいは百歩譲ったとして、先生方のよい授業の中にはよい授業をする子を育てている過程がないということが起こっているのではないかとこの視点です。

よい授業とはよい授業であることとよい授業をする子をどんな育てているということが両立していなければなりません。そうすれば授業をすればするほどよい授業になるはずだし、もしそれが両立していなければ授業をするたびに子どもたちがガサガサしてきてクラスが荒れてくるということになるのです。

愛と規律の話し合い活動

高学年になると、子どもたちはあまり発言しなくなることがあります。学習規律の低いクラスではその傾向は4年生の後半からひどくなります。

このようなとき、子どもたちにはどのような心理が働いているのでしょうか。発言の少ないクラスの発言には特色があります。それは紋切型で、結論だけを先生に聞こえるだけの声で答えるということです。そこには「答えさえ正しいければいいのですよ」「先生に自分が正しい答えを言っているこ

とさえ分かればいいんでしょ」という心理が働いています。

この考えを授業を通して打ち砕かない限りよい授業もよいクラスもあり得ないのです。

「話す・聞く」という学習能力は、あくまでも一人ひとりの子どもたちに備わった個別の力です。しかし、授業という行為の中では、個々の学習能力の発揮が自分自身を豊かにするだけにとどまらず、友だちに学びの材料を与えたり、友だちを励ましたりする力をもちます。しかし、子どもたちは、自分の発言がクラスを励ましたり、クラスの学びを豊かなものにしたりにしていることに無自覚ですし、また友だちの発言にどれだけ自分が励まされ、教師の教えよりどれだけ多くの知的刺激を受けているかも、まったくといっていいほど無自覚です。だから、教師の最も大きな仕事の一つは、すべての子どもたちに、自分の存在そのものが、自分の学習能力の発揮が、自分の学習能力の伸長が、クラスの友だちに及ぼしている計り知れないパワーとなっていることを自覚させることに尽きるのです。これができる

ればクラスの学習規律は格段に飛躍します。「〇〇くんの発言は△△さんの発言に刺激されたんだね」とか「〇〇さんの発言でクラスが活気づいてその後いい意見が続いたね」などの教師のコメントで学力の社会性に子どもたちを気付かせ、励ましていきます。クラスを愛し、友だちを愛するということはクラスのために、友だちのために何かすることなのだ。授業ではそれは勇気を出して自分の考えをみんなに述べることで、これが愛なのだということを徹底することが大切です、

結論ではなく「思考過程」を語らせる

クラスの話し合い活動を活発にするために最も大切なことは教師の発想の展開です。本来、話し合いのおもしろさは、その人の「思考過程」そのものにあるのです。人の話を聞く楽しさは、その人独特の考え方や、そのように考えるようになった過程を聞くことだと思えます。そして、その話を聞きながら、自分との共通点で共感したり、考え方、論理の進め方の違いに触発され、自分の思いを巡らせたりするところにあります。

話し合いのおもしろさは、その人の思考過程そのものにあるのであって、その人を出す結論にあるわけではないのです。ところが学校での学習では結論が第一義だと教師も子どもたちも考えてしまっているのです。授業で子どもたちの発言力を高めるには、まず教師が「子どもを大切にすると、その結論ではなく、その思考過程を大切にすることなのだ」としっかりと心に刻み直すことから始めなければなりません。これが発想の転換、視点の転換です。子どもたちには「友だちを大切にすると、その子の結論ではなく、その子の思考過程を大切にすることなのだ」と徹底して教えなければなりませんし、「話すこと」の指導においても同じようなことが言えるのです。日本の子どもたちが授業となるとうまく話せないのは、結論を述べようとするからなのです。そうではなくて、こうして、こうなると思考過程のままに発言すればいい発言になるんだよと指導してやるのが何よりも大切な一歩だと考えます。試してみてください。新たな展開が期待できます。